



社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

2016/12/1 No.73

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会

本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

ご挨拶



望みの門 千葉後援会
会長 村上恵理也

クリスマスを迎えようとするこのとき、皆さまのもとに主イエス・キリストの父なる神の恵みが豊かにありますように。

わたくしはこの度、望みの門 千葉後援会会長に選任されました村上恵理也と申します。これまでも日本基督教団松戸教会牧師として後援会に加わっておりましたが、新しく託された任に身の引き締まる思いであります。

本後援会は前会長・故石井錦一先生の導きのもと、社会福祉法人ミッドナイトミッションのぞみ会（以下のぞみ会）の皆さまのお働きを後方から支援して参りました。石井前会長の奉仕は三十年余におよぶ期間においても、ボランティア派遣、募金活動、講演会、研修会等その内容においても目覚ましく、皆さまの心にも多く留まるところのものと存じます。本後援会は石井先生の遺志を受け継ぎ、引き続きこの活動が続けてまいりたく祈りを合せています。後任者としてのわたくしはあらゆる点で足りないものではありませんが、

全国の教会関係者からなる後援会員、並びに千葉県下の教会関係者からなる委員とともにこの後援活動を担い、少しでも皆さまのお働きの励みになるようなものになりたいと願っています。どうぞお願いいたします。

さて、本後援会では毎年一回のぞみ会の施設を見学させていただき、現場を守られる方からそのお働きについてお話しを伺う研修会を行っています。本年は去る十月十八日、情緒障害児短期治療施設・望みの門 木下記念学園をお訪ねしました。そこでわたくしども参加者一同に迫ってきたのは、同施設の担う社会的役割の尊さであり、同時にその役割を担う働き人の責任と労働負荷の重さでした。まさに字句通り「日夜」、その使命の遂行のために心身を用いて子どもに寄り添われる施設長はじめ職員諸氏のお姿を目の当たりにした参加者からは、だれからともなく「この施設のためにできることは何か」と問う声が上がりました。

施設を問わず、皆さまの担われている働きの大きさを思います。本後援会はまことに微力ながら、皆さまのために神の助けを祈ることにおいて、またボランティア活動等、そのお働きを具体的にお支えすることに、できる限りのことをさせていただきたいと願っています。日々、利用者と向き合われる皆さまからも、本後援会へのご意見・ご要望

などいただければ幸いです。

まもなく迎えますクリスマスが皆さんにとって、さらには皆さまとともに歩まれる利用者にとって恵み豊かなものとなることを心より祈ります。二千年の昔、主イエス・キリストがイスラエルの都エルサレムではなく周辺のベツレヘムに、病院のやわらかな布団の上ではなく家畜小屋の飼葉桶の中に身を横たえられた、この出来事は、神が主イエスにおいて、この世界に散在する孤独と闇を担ってくださることを物語ります。わたくしどもの神は高みの見物をなさる方ではなく、小さく低きに降られる方です。そうであるゆえに、クリスマスの恵みと喜びの届かないところはありません。皆さまの手の働きがそのことを雄弁に物語っています。

食卓の風景

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家



生活指導員 水野 眞理

宿直の日の夕食を私が作るようになってからすでに二年半が過ぎました。献立は冷蔵庫の残り野菜なども活用し当日決めることが多いですが、買い物に行って新鮮で安い食材を見つけるとメニューがガラッと変わることがたびたびあります。いろいろな工夫をしながら

らの献立作りですが、初めて作るメニューの時は少し緊張します。寮生はおいしいと言ってくれるかな、あの子はこの食材が苦手だけど調理次第では食べるかもしれないなどと考えながら料理するのはけっこう楽しい時間になっています。味に不安が残る時は他の職員にも味見をしてもらい、評判のよいものは食卓に並ぶ回数も自然と増えてしまいます。



料理していると「今日は何ですか?」と毎日のように尋ねる寮生がいるのですが、「今日のメインは〇〇よ」と言うのと納得したような笑顔になります。台所での日常的な会話をあまりしてこなかったかもしれない寮生達ですが、こうした何気ないやりとりが案外心に残るのではないかと思います。食事作りは私にとって大切な仕事と考えています。

食卓では職場の話や今流行していることなどいろいろな話がでます。職員も一緒に食べますが、話題に加わることもあれば、寮生たちが盛り上がっている時は黙って聞いていることもあります。食事はただ食べればよいの

ではなく、話をしながら楽しく食べるという経験をたくさんしてほしいと願っています。食卓での職員の関わり方や会話のタイミングは難しいと感じることもあります。が、「これおいしいね」と言って残さず食べてくれるとそれだけで疲れが吹き飛びます。職場で褒められたとか注意されたとかという話が出た時も食卓での会話はより自然な雰囲気になりやすく、おなかがいっぱいになればそれだけで気持ちも穏やかになるのかもしれない。

この仕事に就いて宿直は未だに緊張する場面がありますが、寮生たちと一緒に食卓を囲む時間をこれからも大切にしたいと願っています。

婦人保護施設 望みの門学園

下谷教会との交流の中で

事務員 天野 志保

七月二十四日曜日。梅雨の合間の快晴の中。毎年の恒例となった日本キリスト教団下谷教会の皆様の間がけがありました。

下谷教会の皆様にはまず日曜礼拝に参加して頂き、礼拝後は談話室や食堂で利用者と楽しいひと時を過ごして頂きました。昼食後は学園の利用者と海まで散歩をして頂きました。利用者も毎年とても楽しみにしています。

利用者は「今日は日焼けをするの」とブルーシートで寝そべってみたり、下谷教会の皆様と楽しくおしゃべりしたり、聞こえてくる波の音や周囲の風景を堪能したり、各々自由に過ごしていました。



海で遊んだあとは各自にジュースをご馳走して頂きました。日差しの強い砂浜にいた利用者は美味しい美味しいと喉を潤していました。帰園間近に全員で砂浜を背に記念写真を撮りました。太陽の眩しさに目をくらませながらも、皆さん今日一番の笑顔を見せたのではないのでしょうか。

帰園後に食堂でお土産に頂いたお菓子を食べながら、ゲームをしました。カラーテープを輪にした物を二〇個用意し、四つのチームを作り。各チームの代表者がジャンケンを行い勝った人が輪を貫いそうして代表を変え何度かジャンケンを行い、用意した輪が無くなった時点で多くの輪を所持しているチームが勝ちます。ジャンケン運と言いますが、

連続で勝つ方逆に何度やっても何故か負けてしまう方もいてとても盛り上がりました。

別れの時間になると利用者全員が自主的に玄関に集まり「来年も来てね」「楽しかったよ。」と笑顔でお見送りをしていました。

望みの門学園は行事などを通し外部の多くの方と関わりを持ち生活をしています。交流の中で外部に興味を持ち自立心を育てています。多くの利用者が自立できるよう職員一丸となって支援していききたいと思っています。

養護老人ホーム 望みの門楽生園

両親への想いを利用者へ

支援員 鈴木 正巳



私が望みの門にて働かせて頂くきっかけは、約二年前、両親の介護をすることになり、介護に関する知識もなく戸惑い、不安の中、望みの門にて介護職員初任者研修の受講者募集をしており、受講申し込みしたことが始まりでした。

最初の配属先は特別養護老人ホーム望みの門富士見の里でした。平均介護度も高く、身体介護が大半を占めており介護の経験のない私は、子供が二人いますが、子育ては殆ど妻に

任せており、オムツ交換、食事、入浴介助など経験が無く、不安と戸惑いの日々でした。この時ほど、子育てに協力しておけばと後悔したことがありますでした。女性介護員のたくましい強さに圧倒され何度か悔しい思いもして毎日が苦しい日々でした。男である以上泣き面は出たくなく、落ち込んだ時は、お年寄りの笑顔が何よりの励みになりました。その後、養護老人ホーム望みの門楽生園に異動になりました。自立者の多い養護老人ホームは、生活・相談支援が主な業務であり、特養との違いにとまどいいつも月日が経ち、曲がりなりにもスムーズに仕事が出来る様になりました。

毎日の生活支援のみならず一人一人のニーズに耳を傾け「相談支援」、言葉を変えて言えば利用者の一人一人の今までの人生をも理解して職員との心の交流を図ることが大切であり、自立して社会復帰するための環境整備、生活の質の向上が求められています。

例として、Aさんは目が不自由で絶えず見えない相手に向かい話かけています。見えないう事への不安、恐怖を考えて食事、入浴など様々な場面の变化(表情、音量など)小さな変化に注意し声掛けなどを行い寄り添えるようにしています。その仕事内容に裏打ちが出る理論の必要性を感じていたところ、井本常務理事より薦められた社会福祉主事任用資

格を取得することが出来ました。幅広い知識と視点で現場の仕事に生かして行きたいと思っています。これから今は亡き両親へ出来なかったことを利用者の方へ寄り添い、頼られる支援員へ成長したいと思っています。

特別養護老人ホーム 望みの門紫苑荘

のぞみ会に入って

調理員 吉田 安代

望みの門合同厨房で働き始めて、今年の九月で三年目になりました。

入社当時は、食事形態も細かく、軟菜食・大荒、粗み、ペーストとそれぞれ分かれていて、戸惑うこともあり不安でしたが、周りのスタッフの方に支えられ現在に至っています。

利用者様も年を重ねて来られた方もあり、二年前と比べ、粗み食の人数も増えてきているように思います。栄養士さんも、利用者様に少しでも召し上がって頂くとうと主食を全粥からおにぎり、またはパンと目先を替えたり全量では多いのではないかと、半量で提供したりもしています。

利用者様の体調により食事形態の変化、また、入荘退荘により食数の変動、また新しい献立などに取り組み、振り返ると早い二年間でした。

昼食は、紫苑荘、楽生園、ハイム、デイ

サービスと四施設にほぼ同時に提供しなくてはならず、献立によっては慌しい時もあります。

そんな場合

でも出来るだけスムーズに渡せる様日々心掛け、調理に臨んでいます。

デイサービスの食事は、日毎に利用者様が変わり、食事形態も個々に異なるので事前に調べ、食数や禁食の食材はないかチェックし調理しています。また、当日急に利用される方や来られなくなった利用者様の變動もあり、当日連絡を頂き対応しています。

季節の行事や誕生会では、栄養士さんが季節に応じた献立を立て調理員が丸となり調理しています。利用者様も行事食を通し季節を感じて頂けるように工夫しています。

食後の下膳時、顔を覗かせると「おいしかったよ」と声をかけて下さり、心が和み明日からの活力になります。特食の提供時は、先輩の調理員さんに教えて頂き日々勉強です。こ



れからも一日一日積み重ねおいしい食事を提供できるよう心掛けて行きたいと思っています。

特別養護老人ホーム 望みの門富士見の里 利用者様と過ごせる貴重な時間

調理員 忍足 直人

富士見の里に配属されて三年が経とうとしています。当施設の厨房は三階にあり、又、調理という職種であるため利用者様と過ごせる機会が多くはありません。配属された当初は、仕事として業務だけをこなす事に、何か物足りなさを感じていました。(何か出来ないか)と。そんな時に「駄菓子屋って企画があるのだけれど、厨房さんも一緒にやりませんか?」と他職種の方に声を掛けられました。企画の内容を聞き、(利用者様の為に活動できるし、触れ合う時間を作れる)と思い、参加させて頂く事にしました。

初めは、名前も解からないので、お話するのがとても不安でした。そんな僕に利用者の皆さんが笑顔で、気軽に接してくれる。とても有り難く、温かい気持ちになりました。回を重ねるにつれ、少しずつではありますが名前を覚え、利用者様の昔話や、食べているお菓子の話、天気の話、など、自然と話せるようになってきました。また、会場の飾り付け

を担当を決めて行っています。僕の担当したのは四月でした。開催日も後半だったので、端午の節句をテーマに飾り付けを行いました。天井から大きな鯉のぼりを三匹設置（ただつるしただけだと活力が見えなかった）、中に膨らませたビニール袋を入れて、元氣よく泳いでいる様に見せた。入口に段ボールで作った鎧兜を設置、鯉のぼりの塗り絵を前もって利用者様に塗って頂き、展示、自分のイメージ通りの飾り付けが出来たと思います。鯉のぼりを見上げて「勇ましいねえ」という声、ご自分の塗った塗り絵を探して喜んでいる方、兜をかぶって記念撮影をされている方、皆さん楽しんでおられました。限られた時間ではありますが、自分にとって利用者様の笑顔に会え、一緒に過ごせる有意義な時間となっています。「駄菓子屋さん」という企画があったからこそ、実現できた時間ですが、調理員という職種にこだわること無く、利用者様と過ごせる時間を増やして行きたいと思っています。



夢に向かつて

老人デイサービス事業 望みの門デイサービスセンター



介護員 川名めぐみ

自分が介護職に就く事は絶対にあり得ないと5年前の私は強く思っていました。

就職先を事務職と決めてなかなか希望の会社巡回合えずにいた私に介護職という選択肢をくれたのは、介護職のイメージからは程遠い金髪の友人でした。金髪の彼女は介護職の素晴らしさ・楽しさをキラキラとした表情で沢山話してくれました。時間はあっという間に過ぎて私にも出来るかも……やってみたいと思う様になりました。

介護の仕事をしてみると毎日あっという間に過ぎてしまいがく仕事に行くことが楽しくなっていました。世間では三K(きつい・汚い・給料安い)と言われていますが、私にはとても興味深く、やりがいと楽しさを感じ介護職にどんどんはまっていきました。「もっとできる技術が欲しい。資格を取りたい」と思い、望みの門のヘルパー二級講習に参加し、そのまま望みの門に入職させていただきました。

最初は紫苑荘に配属となり、排泄交換、入浴介助、食事介助などの利用者様の日常生活のお手伝いをさせていただきました。先輩方から介護技術を教わりながら、沢山の方と接

し、人と人との繋がり、介護の楽しさ、素晴らしさ、大変さ、たくさんのお話を学びました。その後富士見の里、デイサービスセンターで経験を積み、介護福祉士の資格も取得させていただきました。

人前で話をするのが大の苦手だった私も、大きな声を出して大勢の利用者様の前に立ち、体操やレクリエーション、時には皆さんを笑わせることもできるようになっていました。5年前には「無理だ」と思っていたのが嘘のようで、人は変わることが出来るという事を身を持って感じる事ができました。

介護職に就いて良かったと思います。介護士にしか出来ないこともあります。ですが、介護士では出来ない事も多くあります。介護士として利用者様の急変時の対応も出来る事が限られています。もどかしさも感じました。そんな思いを新たに「介護も出来る看護師になりたい!」という目標に置き換えてこれまでの介護経験を生かし、いつか望み会に貢献できる自分になりたいと思っています。



訪問看護ステーション 望みの門訪問看護ステーション

三年目の冬



訪問看護員 鴛田みどり

望みの門訪問看護ステーションに勤務させて頂き、早いもので三度目の冬を迎えようとしています。当初は富津地域の道はまったくわからず、何度間違えたことでしょう。

今では近道さえ覚えるまでになりました。道同様訪問看護の仕事もわかっておらず勉強不足のまま入職、最初の三か月間は同行訪問でしたが初めての一人での訪問はとても緊張しました。スタッフに励まされ頑張れてはいるものの「私にはこの仕事が進まるのか」と言う不安でいっぱいでした。そして利用者様やその家族との信頼関係を築くという難しさを教えられました。そして今は、ようやく利用者様との関わりも慣れてきたように思います。「ありがたいがとう。今度はいつ来るの」と言われる事に嬉しさを感じています。頑張らなくてはと逆にパワーを利用者様に頂いていま



す。まだまだ勉強不足ではありますが、利用者様が住み慣れた自宅で自分らしく過ごせるようお手伝いができればと思っています。

先月は二回の講演会に参加させて頂きました。「難病者様への支援の実際」「日本のホスピス緩和ケアのこれまでとこれから」という在宅でのケア、病院でのケアの講演でした。共通していた事は「連携」「寄り添う看護」これは看護をしていくうえで必要な事だと思っています。望み会には、ホームヘルプサービス・居宅支援事業所・富津地区地域包括支援センター等様々な職種の方々がいます。みなさんと連携を深め、これからも自宅での生活を希望する利用者様の為にも、サービスの向上に努めていきます。ただ看護するのではなく、その人に寄り添いその人の尊厳を守る。訪問看護に携わり色々な事に気づかされています。まだまだ勉強の日々ではありますが、スタッフに支えられ頑張っています。これからもよろしく願います。

住宅型有料老人ホーム 望みの門ハイム

望みの門ハイム紹介



管理者 西尾 建

望みの門ハイムは住宅型有料老人ホームです。ホームを住まいとして希望者に生活支援

や食事の提供を行います。日中、夜間共に職員は常駐していますので、もしもの時にも安心ですが、日常的な介護は原則として提供していません。介護等が必要になった場合には、自室で介護保険を利用して訪問介護を受けたり、

デイサービスに通ったりするホームです。

実際に、入居されている方の中には食材の買い物と通院の送迎サービスを利用されるだけの少しのサポートで生活を送っていらっしゃる方から排泄、入浴、食事の介護を受けて（外部サービスの利用でハイムでの生活継続が可能な場合に限る）生活される方もいらっしゃいました。当然、ご自宅と同様にお友達を招いたり、外出や外泊もご自由です。ご高齢になってくると生活に色々な心配が生じてくることもあると思います。入居者それぞれの生活にあったサポートで充実した生活を送ることができると思います。

望みの門ハイムでは、法人の運営する訪問介護・看護、デイサービス、ショートステイ



が同敷地内にありますので生活の組み立てがしやすいことが大きなメリットです。また、十居室十一名の小規模定員であるため、職員を含め、いつでも皆さんの顔が見える家庭的な雰囲気です。夏には素麺パーティー、秋には焼き芋会など、昼食会も含めると毎月行事があります。もちろん参加はご自由です。入居一時金を廃止しましたので入居しやすくなりました。現在、二室の空きがございます。是非、一度ご見学ください。

就労継続支援事業 望みの門新生舎

エコクラブ奮闘記



職業支援員 小川 喜之

エコクラブは現在十七名の男性利用者が所属し毎日外作業に励んでいます。夏は暑いし、冬は寒いし、雨が降れば合羽を着てと季節や天候に合わせて作業をしなければなりません。エアコンの効いた作業室の中で作業ができたらどんなに楽だろう……。なんて考えたら良い野菜や花や米はできませんからね。正に雨にも負けず、風にも負けずといったところですよ。

春には田植と並行して夏野菜の種蒔きや定植、それが終わると日々草やサルビアの種蒔きが始まります。その頃になるとちょうど夏

野菜の収穫が始まり炎天下、茄子の収穫が毎日の様に続きます。田圃では草の最盛期、職員が草刈りした後を利用者の皆さんが刈った草を集めます。九月早々に稲刈り



を終えると米運び。三〇kgの米袋を今年は二四八袋、力を合わせて運び入れました。注文がどんどん入って来るので毎日何十キロも精米し、広げて熱を冷ましたら規定のキロ数に合わせた袋詰め。その頃ちょうどパンジーの苗が種苗会社から宅急便で届くので精米やら袋詰めやらパンジーの移植作業で大わらわ。毎日忙しい、忙しいと思っているともう法蓮草の種蒔きをしなければいけません。十月に収穫するには九月の中旬に畑を準備して種を蒔きます。もちろん一回限りではなく、冬の間ずっと収穫できるように期間を開けて順次に行っています。ハウスでは冬野菜(キャベツ・ブロッコリー・空豆)の種蒔きや移植作業が始まり、パンジー、ビオラが出荷の最盛期を迎え、色分け、選別、納品、配達と毎日トラックが走りまわります。

この様に一年中忙しいエコクラブ。季節に合わせた作業はいつも同時進行で行わなければならない、頭を悩ませるところです。エコクラブの利用者の皆さんは暑さ寒さにも負けず、ほとんど休むこと無く毎月皆勤賞がもらえるほどの努力家でいっぱいです。みんなの力を合わせて一つの作業部ができていて、それがエコクラブの一番の良いところだと思います。皆さん一年とても頑張ってくれました。また来年もみんな頑張ります。

共同生活援助事業 グレースホーム

いつか芽を出せ柿の種

世話人 齊藤 房子

グレースホームの食事で、デザートに柿が出たときのことです。柿には大きな種が何個かついており、「この種を植えたら柿の木になるかな」と話しが盛り上がりました。話しはそこで終わりましたが、一人の利用者さんが食後、花が植えてあるプランターにこっそり柿の種を植えていました。「芽が出るといいね」と話しかけると無口な利用者さんは笑顔でうなずき、普段はプランターの草花に水をかけたことなどないのに、柿の種にはその後も水をかけているのを見かけます。まだ芽は出ていません。

柿の種ではないけれど、芽が出るか出ないかわからなくとも、少しでも利用者さんに可能性があれば、チャレンジ！です。

ある利用者さんは、食事の手伝いをよくしてくれま

すが包丁は怖くて持てません。でもやってみたいという気持ちもあるようなので、世話人と一緒に野菜を切ってみたところ、思いのほかきれいに形が揃っており、周りのみんなから沢山褒められたのです。その後も世話人と一緒に何度か切っていくうちに自信に繋が

り、調理する楽しみを見つけました。小さな芽が出ました。

編み物が大好きな利用者さんは、みんなに帽子を編んでプレゼント。みんなからの「ありがとう」の言葉で、ニコニコ幸せの芽が伸びてきました。まだまだ伸ばしたいよう

で、今は世話人の分まで編んでくれています。

また、自傷で自分の手をひっかいて傷を作ってしまう利用者さんは、「お仕事頑張ってるね」「指きれいだね」と話しかけると「仕事頑張る」と元氣な言葉が返ってきて、傷を作ることが減ってきました。自分を見てもら



えたことが嬉しくて、ここにも小さいけれど幸せの芽が出ていました。

「笑顔」がモットーの利用者さんは、利用者さん同士の小さなケンカも「みんな仲良く」の一言でその場を明るくしてくれ

ます。彼女の笑顔の芽は今日も伸びています。

本当に小さいことでも、「ちゃんと見守っているよ」が伝わると、みんな自信にあふれた笑顔で自分たちの芽を伸ばしてくれ

ます。まだまだ小さい可能性はたくさんあるんです。：早く芽を出せ柿の種…。

地域活動支援センター 望みの門ヨカデイサービスセンター 楽しむ為にも健康づくり

管理者 榎本八重子

十一月になると利用者さんの大きな楽しみが二つあります。その一つに「かずさの里感謝祭」があります。昨年は風邪が流行し参加出来ませんでした。「今年こそは行こうね」「風邪を引かないように」「仲間と喧嘩をしないで仲良く生活する」を約束事として一年間楽しみに待っていました。

さあ、待ちに待った感謝祭当日です。前日の天気予報では雨の予報でしたが利用者さんの行いが良かったのか天気に恵まれました。お客さんの多さにビックリしながら会場を散

策。その後、焼きそばを食べたりジュースを飲んだり演奏を聴いたりみなさん満足した一日を過ごすことができました。そしてもう一つは恒例の紅葉狩りです。今年も富津の名所、志駒もみじロードをドライブし昼食は豪華な舟盛りのお刺身と天ぷら。利用者さんからは、「お刺身大好き、特にマグロが好き」と今から楽しみにしています。

このように「外出や行事」は、日々の暮らしに変化や潤いを持たせ充実した生活を送るうえで大切なものになっています。しかし、外出を楽しくするには体力が必要です。ヨカデイでは踏み台昇降で足腰の筋力づくりをしています。運動することは利用者さんにとって楽しくないかもしれませんが。毎日、毎日継続することが大切。毎日を

楽しく過ごしてもらうためにヨカデイで何をトレーニングするか。日々考え頑張って支援しています。

私事ですがこの頃、日常生活のなかで



いやでも意識せざるを得ないことが増えてきました。かがんで自分の靴の紐を結べなくなったり、階段を上るのがいやになったり、何かするとき「どっこいしょ」と声が出たり、痛いところが増えたり、「若い時には何でもなく出来ていたことができなくなって来た」のです。これが「老い」ということなのかと。

ある本に「老いは神さまからの贈り物、老いを意識する時、人は柔和で謙虚にならないといけない。謙虚に人に世話になり……ふがいない自分と向き合い仲良く生きていくのです。」とありました。利用者さんの中にお風呂が大好きな方がいらっしやいます。「お風呂が温かくていい気持」と毎日うれしい言葉をかけてくれます。自分で出来ることはなるべく自分でやってもらい不得手なところを職員がお手伝いしています。彼女の不得手なところは背中と足が拭けない事、「背中で足拭きますね」と言う「ありがとね、うれしい」とかえってきます。

私は当たり前のことで「お互いさま」という気持ちでお世話させてもらっています。利用者さんの「ありがとね、うれしい」という言葉はまさしくお世話になっている素直な気持ちの現れではないでしょうか。職員として当たり前のことですがその一言で私は「良かった」と救われます。まだまだ「老い」には負けないぞ。……

千葉中核地域生活支援センター 君津ふくしネット 今、仕事を通して学ばせていただいています

相談支援員 山本 充枝

中核地域生活支援センター君津ふくしネットでは働き始めて四ヶ月経ちました。中核には先輩職員が三人、今年からの職員が五人、計八人の職員がいます。先輩職員から「中核には法律の後盾がない」「ね、おいしいお茶があるからのもう」と言っている仕事上の忙しさや重苦しさを和ませて下さる先輩、「仕事上、人の人生に触れることが多いので今までのように表面的には見なくなった。」と言う先輩、猫大好きさん、パン大好きさん、そして私の三人と生活困窮者自立支援事業の麗しき若手女性職員二人は新米職員です。

数日前事務所の真ん前にあるイオンに数台のパトカーや、消防自動車が多かったので何かあったのかと思っていたところ、その夜のニュースで傷害事件があったと報道されました。若い女性店員が若い男性に刃物で傷つけましたが、この犯人の人生にこれまで何があったのだろう？被害者の女性は、今後どんな風に回復できるのだろうか？を気にしている自分に気がしました。

中核の研修会で犯罪者による事件の出口に

中核の支援の存在があることを千葉地方検察庁から来られた講師が語って下さり、この時にも中核の仕事の意味を深く考えました。日々電話相談や他の相談などでも、まずご本人の話を聞くことが大切な仕事と思って受けています。しかしニュースや研修で改めて社会の中で困難を抱えておられる方が如何に多いか、そして生き辛さを抱えている方のことを見聞きする度にもし、私たちが相談を受けることで救われるならと思いを新たにすることです。

電話の他、これまで私が関わったケースは、生保を受けることになったケース、病院への付き添い、そして様々な困難を負う方のケース、地域での困り事、家族関係等があります。人は人との繋がりで崩れるとき、人は倒れ、また、人との繋がりを回復することによって、立ち直る。中核の努めはその過程で人の力によって支援を行うにあります。中核ならではの醍醐味

なのかもしれません。制度に乗っかる以前に相談支援を通して、人の力をフルに使って福祉と言う制度に繋げる機関なの



ではないかと気付かされたのです。日々、相談者に関わって、その節目にどうしたら助けとなるかが出来るか？チームで又は、一人で日々忙しく走り回っている先輩の後姿を見せていただき、これからも学ばせて頂きたいと思います。

児童養護施設 望みの門かずさの里

里に就いて



児童指導員 椎名 翔太

私は人と深く関わりたいこと、自然に囲まれた環境で仕事がしたいと思い、かずさの里に就職しました。そのように思い始めたのは、私が学生時代に参加していたボランティアが大きく影響しています。そのボランティアは発達の遅れや知的な遅れを持つ子どもたちと六日間、個別支援をしながらキャンプをして過ごすものです。この経験は支援や配慮を必要とする子どもと関わることに興味を抱く原点となりました。そして今までの子どもへの関わりや価値観を覆すものでした。言葉を発せない子どもたちと向き合う中で、その子のことだけを想い、寄り添い続けるという貴重な体験であったと感じます。彼らと衝突することや助けられることを通じて、子どもたちの目線で考え、感じるこの大切さを学びま

した。そのため、この経験が里での仕事に還元できればよいと思い就職しました。

それから里に就いて半年が過ぎ、新たに思うことがあります。それは長期目線での支援が必要であるということです。「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えよ」という老子の格言にもあるように、何を声掛け、何を一緒にやり、何に手を貸すのか、本人の自立のために判断が必要だと感じました。また、こちらが待つことが大切なときもあるのです。子どもに何かを促したとき、早くやらないという大人の価値観だけでなく、五分待ったらその子が自分からやることもあるのかもしれません。

最後に、子どもたちとの関わりでうまくいかないこと、傷つけられることもたくさんあります。しかし、そのたび「子どもからの攻撃（口撃）は回復の兆し」という言葉を思い出し、心の支えとなって



います。そして、なぜそのような発言をするのか、本質は何を伝えたいのかと熟考し、その子自身の言い回しを理解することが大切だと痛感します。

このようなことを日々考えながら、子どもたちに寄り添うことを忘れずに仕事をしていきたいと思っています。

乳児院 望みの門方舟乳児院

一年目

保育士 前澤 美希

方舟乳児院で働き始め、初めての冬を迎えようとしています。保育士として働いていた時期はありましたが、乳幼児との関わりは初めての経験。子ども達のこの大事な時期に私に関わって良いのかと不安でいっぱいでした。そんな不安とドキドキでスタートした春。慣れない抱っこや人見知りで大泣きされることもしばしば。沐浴も初体験。何もかもが一からのスタートでした。

暑い日差しの下でびしょびしょになりながらの水遊び。甚平を着て灯篭流しへお出かけ。園庭で栽培した取れたトマトは格別です！紙粘土でお月見団子を作りスキと一緒に撮影会。ハロウィンでは職員も一緒に仮装しておやつをもらいました。遠足では、手作りお

弁当と手作りおやつを持って出発。公園や水族館などいろいろなところへと行きました。季節の行事を大切にし、子どもたちの心と五感も育てる。さあ今年の冬はどんな出来事が待っているのでしょうか。

子ども達と共に時間を過ごすことで一人ひとりの成長する姿を感じられるようになりました。不安でいっぱいだった気持ちが日々の成長を感じることで次第に感動と嬉しさの気持ちへと変わり自然と自分も笑顔になってしまいます。

様々な家庭環境から来る子供たち。病弱な子ども。今、私に足りないものは知識不足と経験不足です。保育士として、また方舟乳児園で働く職員としてまだまだ未熟です。子ども達が安心して生活できる環境を作り、大人との関わり、一人ひとりと信頼関係を築けるよう日々努力していきたいと思っています。

子ども達の笑顔を大切に今日も方舟乳児園に出勤です。



子どもと、おとな

児童家庭支援センター 望みの門ピーターパンの家



相談支援員 斎藤 美紀

今年の四月、四年間慣れ親しんだ「望みの門学園」を異動になり、児童家庭支援センター「望みの門ピーターパンの家」に来ました。子どもと家庭にまつわる様々な相談を受ける「児家セン」では、専門知識や経験が必要とされ、毎日が新しい学びに溢れています。

ある日、隣に座っている職員が「斎藤さん、絵が上手ですね」と褒めてくれました。私は嬉しくなり「そんなことないけど、褒められると嬉しい」と返しました。するともう一人の職員が「そうだよね、大人でも褒められると嬉しいよね」と言いました。その言葉を聞き、何だか少し恥ずかしい気持ちになりました。自分が子どももみたいだなと思ったからです。でも、そうなのです。やっぱり褒められれば大人も嬉しいのです。

センターに来る親御さんの中には、自分の育て方が悪いから子どもの発達が遅いのではないか、と心配される方が多くいます。「また子どもを叱ってしまいました」と自分自身を責めている方も多くいます。私たちは「小さい子どもを頭ごなしに叱っても意味がないので、具体的にどうしてほしいのかを伝えま

しょう。良いところを褒めて、自信をつけさせてあげましょう」という内容を伝えます。

しかし、センターに来て下さる親御さんの多くが「わかっていて

もそれが出来ない」と自分を責めてしまうのです。我が子の将来を思うからこそ必死になる。私は時折思います。子育ての経験がない私は、子育ての本当大変さや苦しみをまだ知らない。そんな私に何が出来るのか。そんな時、私はこう思うようにしています。私には「わからない」。だから、「わかります」と簡単に言うてはいけません。でも、「わかりたい」という気持ちを持ち続けていたい、と。

子どもが何か出来たときに、「見て、出来たよ」という顔をして大人の顔を見えます。すると大人は当たり前のように「上手に出来たね」と褒めてあげます。すると子どもは喜び、もっとそれをやろうとします。大人は子どものその笑顔に励まされ、子どものために何が出来るかを考えます。そんな人を人は褒めたくありません。他人の良さを褒められる人もまた、素敵な大人。褒めたくありません。大



人になると褒められることが少なくなるけど、大人もやっぱり褒められたい。褒められると認められたようで嬉しい。そして実は、褒めている人も嬉しいってことに気付くのです。

情緒障害児短期治療施設 望みの門 木下記念学園

開所から半年



児童指導員 宅見 奎亮

木下記念学園が開所して半年が経ちました。今日に至るまで様々なことが起こり、毎日が挑戦の連続だったこの学園にも、ようやく秋の風を感じることでこの時間が増えた気がします。こども達も徐々にこの施設での生活に慣れ始めています。

入所当初は、こども・大人ともに新しい環境で新しい取り組みを行うということで混乱が多く、頭を抱えていました。そんな中、少しずつお互いが歩み寄り、問題と向き合っていくことを始めました。徐々に距離も縮まり、一つ一つ丁寧に一緒にやっていきました。こどもたちもここにいることの意味を考えつつ、この施設の中で楽しみを見いだそうとすることが増えました。そしてそれを大人も受け入れ、形にしました。夏休みには毎週行事を行いました。その行事の中に、この施設で初めてとなる外部の人（司法書士法人新

宿事務所CSR活動部）を招いてBBQをしました。当施設で初めての試みということで少々緊張していましたが、とても楽しく過ごすことができました。



今回の夏休みでは、おのおのの成長を肌で感じる事ができました。まだ夏休みの余韻があるようで、未だに夏休みの行事の話が話題に出ってきます。夏休みを終えると学校が始まります。新学期からは気持ちを新たに、問題と向き合い、生活の中に楽しさを見いだしながら有意義な毎日を送っています。最近では、この施設の意味というのをこどもも理解して大人が支援をするという姿勢が多く観られており、子ども自らが、暮らしやすい様にルール作りを行う姿も見られるようになりました。

まだまだ施設全体では、問題はたくさんあります。ただ、少しずつではありますが、一歩一歩確実に前に向かって進んでいるような気がします。これからも、こどもも大人も笑顔で暮らせるような施設にしていきたいと改めて思いました。

編集後記

第一待降節を迎え、町のあちこちに綺麗なイルミネーションが目につくようになりました。この七十三号の巻頭言は、このたび望みの門京葉後援会会長に就任されました村上恵里也先生に玉稿を頂きました。感謝いたします。

去る十月十一日にはドイツのビーレフェルト市から「三〇名余りの合唱団」が来葉され、十日の西千葉教会でのご奉仕の後、かずさ湊の富士見の里（特別養護老人ホーム）にて、大変感銘深い合唱「さくらさくら」をはじめご披露され、お年寄りをはじめ私たち聴衆はまことに楽興の一刻を楽しみました。合唱のあとは短い時間ではありましたが、三階のホールでお寿司をつまんでいたが、楽しい交流の一刻を過ごして頂き名残を惜しまれつつお別れしました。

世界は益々小さくなり、社会は激変する様を見せています。望みの門の生い立ちドイツにあると言ってもよいでしょう。お別れしたシェーア先生をはじめ皆様方の上に心から神の祝福をお祈りいたします。（Ｙ・Ｉ）

